

## 大邱府よりの引揚げ

神奈川県 庄野 正 則

私は、昭和八（一九三三）年の四月に、徳島県小松島町という、淡路島を介して阪神地方と四国を結ぶ港町で生まれた。徳島市から南に少し下がり鳴門海峡に面した、風光明媚な所である。親せきには、旅行客のための宿屋を経営している家が多かった。しかし時代が移り変わり、瀬戸内の連絡船や観光船、そして本州と四国を結ぶ鉄道などの交通機関が発達するに従って、小松島港を通り過ぎて徳島や高松方面に直行する人々が増えて、わざわざ小松島で一泊するような客はだんだんと少なくなり、かつてのにぎわいは無くなってきた。

親類縁者は、新しい天地を求めめる必要に迫られていた。といつても大した教育を受けているわけでもなく、期待するほどの発展もなかった。それでも若い者は、

阪神地方に出て商家に奉公することが最大の希望であった。残った老人は、細々と営みを続けている宿屋でなじみの客を相手にすることが、精いっぱい働きのあった。

そんな世上であつたので、三十歳台になっていた父も、生活を立て直すために警察官になるべく試験を受け、首尾よく合格した。朝鮮での勤務を希望して採用されたということで、ただちに単身で大邱府に赴任した。

なぜ朝鮮勤務を希望したのか？ どうして大邱に赴任したのか？ その理由は今になってみると不明である。あるいは、本人の意志とは関係なく割り当てられて、致し方なく行ったのかもしれないが、よく分らない。

昭和十五年の春に、祖父と母、そして七歳になったばかりの私、一家三人は単身赴任中の父のもとに行くことになり、一路大邱府に向かった。

渡鮮するに際して私が一番に期待していたことは、当時、満州国を縦断する超特急列車として、少年たち

のあこがれの的であった「ア ज्या」号を見ることであつた。しかし、それは叶わなかつたが、その代わりに海上交通の雄であつた豪華連絡船の「興安丸」に乗船できたことは、大変な喜びであつた。そのときの感激は、今になつても消えることがない。

「興安丸」は当時、就航四年目の最新鋭の商船で、総屯数が七千百屯もある巨船で、その雄姿は実に堂々たるものであつた。そんな船に乗船できたことで、未知の異郷に行く不安な心は一挙に飛んでしまった。しかし、それから数年後、敗戦と共に「興安丸」は引揚船として、失意のどん底に陥っている多くの人たちを日本の本土に運んだことで有名になつたが、まったく数奇なる運命をもつ船となることは知るすべもなかつた。

私は、その「興安丸」の船中で買つてもらつた「少年倶楽部・紀元二千六百年特別記念号」を読みふけていて、ご機嫌であつた。当時は、既に支那事変が泥沼の状態になりつつあつて、日本をめぐる内外は陰鬱な空気が漂い始めている時代ではあつたが、なにゆえ

に一家が異郷に旅立つのかなどは、深く考えることもなく、単純にただ久しく離れて生活している父の所に行くのだという思いだけだつた。祖父や母のやや暗い顔色については、何も理解できなかつた。

旅は、何の変わったこともなく、釜山港で「興安丸」と別れ、朝鮮半島を北上して無事に大邱に着き、父が一人で暮らしている官舎に落ち着いた。官舎は、四、五軒長屋のごとくに集合した和風建造物であつた。異郷ではあるが、一応の生活の安心感があつた。表通りに出ると、日本人が経営している商店などが数町にわたつて立ち並び、繁盛していた。その様子は、あたかも日本人の力を誇示しているようにも見えた。

大邱府は、朝鮮半島の南東部、小白山脈を背にした中央盆地に位置し、そのころでも朝鮮第三番目の人口を擁する都市であつたが、駅前広場、市場、市街地の商店街などの建物は雑然としていて、あたかも本土の城下町のような印象を受けた。

日本人小学校は二校あつて、私の入学した本町小学校は、市街地の中心部に近いにぎやかな所にあつたが、

もう一つの東雲小学校は東部地区にあって、官吏や軍人の子弟が多かった。小学校以外には、大邱師範学校があったが、その生徒はいつも乗馬姿で街中を闊歩していて、私たち小学生にとってはあこがれの的であった。もし敗戦ということがなかったならば、私も師範学校に進学し、乗馬姿になっていただろうと思う。

そして朝鮮半島の片田舎の植民地小学校の、しがたない教師になっていたかとも考える。他に、医学専門学校があったのではないかと思うが、あまり記憶にはない。

日常生活で特に有名だったのは、リンゴ、大球大根、そして漬物である。リンゴは小ぶりだが味が良く、刻んで朝鮮漬けに混ぜたりしていた。リンゴの木箱を物置に積んでおくと、真冬にはシャーベット状になっていておいしかったことを覚えている。漬物は日本人にはなかなか上手にできないので、地元のオモニ（おばさん）に頼んで仕込んでもらった。無尽蔵のようにあるタラコと一緒に漬けるのだが、すばらしい味であった。一度も欠かすことなく弁当箱に入っていたものだった。

大邱に着いて、すぐに本町小学校に入学したが、クラスは百パーセント日本人ではなく、どの組にも二、三人の朝鮮人・中国人の生徒がいた。いわゆる「ヤンバン（実力者や金持ちの人たちのこと）」の子弟である。勉強はよくできた。遊んだり、学んだりの子供同士の付き合いは、この人たちとのことが多かった。しかし、戦後の韓国内ではその存在を随分、非難されたとの話を聞くが、結果的にはその能力からしても、韓国社会のあらゆる分野において、実力者となった人が多いと聞いている。これらのごく少数の生徒たちを除くと、大部分の朝鮮人の生徒とは、あまりなじめなかった。相手も日本人小学生とはまったく顔を合わせることをせずに、かえって喧嘩を売ってくるようだったが、いつも「多勢に無勢」でこっちが逃げ出すような喧嘩だった。

小学生時代の思い出を一、二記してみる。

その一 昭和の初期の大相撲で、前頭筆頭までのぼり詰めた大邱山という関取りがいたが、この人はわが本町小学校出身の先輩で、一年に一度の地方巡業で朝

鮮にやって来るときには、母校の土俵に上がった。私たち選ばれた十人ぐらいが束になってぶつかっていったが、びくともしななかった。結果的には振り回され、倒されてしまう。私の手の高さが、ちょうど関取のへその辺りだったことを覚えている。そんな関係からか学校でも相撲が盛んで、土俵の整備にも力を入れていた。順位戦では、私はいつも前頭筆頭だった。

その二 日本放送協会（現在でいうNHK）の大邱放送局に美人アナウンサーがいた。名前は忘れたが、その人が戦時下における小学生の剣道の鍛え方について放送するという事になって、私のほか体力のある者数人が、一週間ぐらい郊外にある放送局に通って竹刀を振り、その音を録音した。説明はすべてそのアナウンサーがした。今になってみれば馬鹿馬鹿しいことだが、当時ではそのアナウンサーのやさしくソフトな感じの言い、そしてその態度は、戦時中のすきんだ日常生活の中ではめったにお目にかかれないうことで、その人の前ではほめてもらいたさに、みんな本気になる竹刀を振ったものだった。

大邱は、三寒四温のはつきりしている大陸性気候の地で、真冬の寒さ、真夏の暑さは極めて厳しいものがあった。戦時下のことでもあり、「戦地で戦っている兵隊さんの苦勞を忘れるな！」が合言葉になっていた。学生服上下のポケットというポケットは全部縫い合わされてしまい、手を入れることはできなかつた。もちろんのこと手袋も使つては駄目で、我慢も限界に達していた。指先には大きな霜焼けの跡が残り、夏になつても消えることはなかつた。今でもその跡が、かすかながら残っている。

そんな厳しさに耐えていたが、官舎の中は別天地で、部屋の一つにはオンドルという今で言えば床暖房があつて、温かくて有り難かつた。

真夏の炎天下でも長時間の朝礼があつて、女生徒やときには体の弱い男子生徒が倒れることもよくあつた。女の先生でも倒れることがあつた。倒れた者を保健室に担ぎ込むのは、学校に派遣されている陸軍の下士官の人たちであつた。

私たち男子生徒は、お国のために命を捧げることが

純粹に信奉していて、六年生になると「特攻志願は、あと何年後だ！」というように心待ちするような気持ちで、指折り数えていた。しかし、このような殉国の信念は、内地の同年代の人たちと比べると、多少の温度差があったのではないかと思うことがあった。それだけ外地にいる者には、祖国日本への思いは、ことさらに強いものがあつたのではないかと思うものである。

昭和十六年十二月八日には、太平洋戦争に突入した。前年の春に、家族三人がいろいろな思いをもって大邸に移り住み、やっと父の息吹のもとで、家族が貧しくとも平和で落ち着いた日々を過ごすことができるようになって、まだ二年も経っていないとき、突然に父に召集令状がきた。

私が知つたのは、学校で体操の時間だった。先生から呼ばれて校庭の隅に行ったら、父が二等兵の襟章をつけた軍服姿で立っていた。「元気で！ 頑張れよ！」ぐらいの当たり前の言葉しか言わなかった。肉親の生死の別れにすら、異国の感覚で応答するほかない時代だった。

父は、家族に囲まれて、ここ大邸の地でしつかりした家庭を築こうと決心していた矢先のことであつた。父の心中を思うと、察するに余りあることだった。戦争という不幸が、父のすべての計画を取り壊してしまつたのだ。後年に私が父の年代になったとき、しみじみと思つたことだった。

父が、出征して間もなく妹が生まれた。父親の顔も知らない、かわいそうな赤ん坊であつた。隣近所の人たちとまだあまりなじみもなく、もちろん親類縁者や友人もない母にとつて、身内は祖父だけであるが、その祖父も全くの隠居を決め込んでいて、役には立たなかつた。母は、人には言えない苦勞を随分としたことと思う。祖父は大変におとなしい性格の人であつたが、本来は腕の立つ仏具職人であつたそうだ。しかし、五十歳になつたら隠居するということを以前から宣言して、それを実行した。

昭和十八年の二月二日の夜、オンドルの部屋で寝ていたが、夜中に痰をのどに詰まらせてしまい、静かに息を引きとつていた。

当時の外地は、一般的に内地と比較して平均的には食糧事情は良かったと聞かされているが、大邱府に関する限りは全くその反対であった。米は早々と少なくなり、稗、粟、玉蜀黍などの混ざった、普通ではとても食べられないものが主食として配給された。ジャガイモが、一番のごちそうという日が続いていた。私が家中を探して、やっとジャガイモを一個発見ということもあった。

妹は、慢性の栄養失調となり、そのうえ冬場になると百日咳を併発して苦しんでいた。その日その日の糧を闇で補うにも、お金が残り少なくなっていた。私は小学校の高学年になっていたが、家の経済的なことは詳しく聞けなかった。母の唯一の頼りは、徳島に残してきた財産であったが、その財産である古い家作が、どんなわけか知らないが他人の手に渡ってしまったらしいことを、薄々と知った程度だった。異郷にあって、しかも特別な情勢下において他人の援助を仰ぐことは不可能なことで、いよいよ一家全滅という危機を感じ始めた。しかし、神は私たち一家を見捨てるようなこ

とはしなかった。

昭和十九年の秋に、父がひょっこりと除隊して戻って来た。

父の話によると、出征してからマニラー・シンガポール・仏印・チモール島と、軍用貨物車を乗り回して戦場を駆けめぐり、最後は東チモールにて草木の芽などを食べながら生き延びていたとのこと。もともと、肺疾患を患っていたうえにマラリアにかかってしまい、四十歳に近い老兵であったので、東チモールからの最後の脱出用舟艇に席を与えられて日本に帰還して、大阪の陸軍病院でしばらく静養した後を除隊となったとのことだった。この父の無事の生還が、我が家族にとつていかにすばらしい幸運であったかは、うまく表すことのできない出来事であった。

昭和二十年になると、戦局もだんだんと急を告げてきた。私たち小学校六年生の生徒にも、毎日勤労奉仕が命ぜられた。その疲労度は相当に激しかった。まず第一の仕事は、季節にかかわらず公道上の馬糞集めであった。直接手で拾えと言われたが、あのぬくもりは

今もって忘れられない。むしろ懐かしささえ覚える。

また終戦に近いころになると、市街地から四・五キロメートル離れた前山のゴルフ場の芝生を全部はがして、農作物を植える作業をした。芝の根を細かく砕いたが、そのチェックが厳しかった。帰り道では、松根油を取るための松の丸太を一人一本ずつ、縄で腰に結び付けて地面を引きずりながら運んで、校庭に集積した。私はまだ体力が残っていた方であったが、本当にきつかった。毎夜、寝るころになると発熱するようになっていた。その影響は、終戦後になってもしばらく続いている、肺病になったのではないかと言われた。体力的に無理であっても、気持ちのうえからは「国の非常時に際し小国民でも！」という真面目な気持ちが先に立っていたのだろう。

我が家にとつて、昭和二十年八月十五日は、戦争終結を知らされた日ということ以上に、忘れてはならない日となった。薄幸だった妹が、十四日の夜遅くに病院で息を引きとり、十五日の朝に我が家に戻って来た。そして、今日中に火葬場に持ち込まねばならなくなっ

た。十五日の朝になって、病院で「日本人の火葬は十五日以降は受け付けない」といううわさが耳に入ってきた。父は止むを得ずに、早朝の焼却について特別許可をもらった。家の庭で納棺をする際に、母は妹の遺体を抱いて離さなかった。父や住職さんなどの説得に對して、泣き声のみが戻っていた。

私は後年になって、「室生犀星詩集」を読んでいて、同じ場面を見いだして痛哭に耐えなかった。

葬儀は、二年前の祖父のときに比べれば、極めてさやかなものであった。夜になると、床の間には二つの骨壺と二つの位牌が並んで置かれてあった。我が家において、戦争の残したものはこの二つのみであったが、この二つのものは白い布に包まれて私が四六時中守り、引揚げには私が抱きかかえて日本に帰った。

八月十五日が過ぎ、日本人は外出を控えるように言われた。朝鮮人も様子を窺っているのか、表通りは比較的に人の動きが少なかった。日本軍の憲兵が、隊本部に向かって慌ただしく歩いているのが目立っていた。表通りは、数カ月前から強制疎開と称して空襲による

火災の延焼を最小限にとどめるために、家屋の取壊し作業を実施していたが、それが終わったばかりであった。

子供は外見から朝鮮人の子供との見分けが難しいことから、外出も大目に見られていたので、外に出る必要のある雑用は私たちの仕事となっていた。以前(敗戦前まで)は朝鮮人の仕事であった。ゴミ箱の掃除も私たちの仕事となった。

学校は、春の一学期の初めころから自然休校のようになっていて、六年生になっても一日も登校していなかった。両親などは、校長先生に会いに行っていたようなので、その理由は知っていたかもしれないが、私たち子供には何も伝わっていなかった。友だち同士で会うと、話はずぐに「おれたちは、一体どうなるのか？」だった。

日本が戦争に負けたことを最初に聞いたときの自身の反応は、まず何よりも、この異郷の地から抜け出して、無事に日本に帰れるのかということだった。十五日以前までの覚悟だった「日本を守るための戦い、

玉砕も辞せず」などということは全く頭の片隅にも出てくることなく、ただ自分たちの身の安全が一番の心配事であり、関心事となっていた。その心変わりにはや不思議に感じつつも、そのように思うのが当然だとも考えた。戦時中のあの熱烈な軍国教育を受けながら、心の底では「生きることのみ！」ということのみを考えていたのである。そして、二、三年早ければ当然に参加したであろう特攻隊員を、敗戦という結果から免れたことの幸運をしみじみと感じていた。

それからの半月ないし三週間ぐらいの出来事は、私にとって人生最大の冒険であった。敗戦になって、大邱府に居住していた在留の日本人が最初に起こした大きな行動は、引き揚げるための船の手配であったと思う。当時、大邱府は朝鮮半島で三番目に人口の多い都市であったが、京城や釜山に比して日本人居留民は少なく、いろいろな情報も十分に入ってこなかったもので、引揚げ行動についての適確な判断も難しく、闇船を雇うかそれとも日本からの引揚船に頼るのか、どちらが最善なのか議論が分かれていたようであった。少して



も自分たちの私有財産を持ち帰りたいと考えている人たちは、日本人の漁船を闇船として借りあげるのが得策であるという意見であったし、一方ではそのことに對して信頼性に不安を持っていた。

みんながいろいろと思案をしているころ、近所に住んでいる「ヤンバン」が、百隻の闇船を手配して、日本海に面している浦項（ポハン）から、日本人の希望者を脱出させたが、無事に日本の予定した港に着いたのは、数隻に過ぎなかったという話も伝わってきた。

それでも、日本から来る引揚船だと、一人がリュックサック一個と手荷物一個に制限されるので、それよりはという損得勘定から闇船を考える人が多かった。

我が家も、隣近所の教家族と共同して、闇船一隻を雇ってここから引き揚げる決心をした。一人につきつづら箱三個という具合に決められていた。釜山までは人と荷物と一緒に乗る家畜用列車で行くこととなった。折からの台風の後ということもあって、線路の両側は濁流が渦巻いていて、悪臭に鼻をつまみながら運ばれた。

釜山港の岸壁に横付けされている漁船の、小さくて、そして貧相で古臭いのにびっくりした。これであの名にし負う日本海の荒波を渡りきれれるのかと思うと、不安がつのつてきた。瀕死の病人を、二人も戸板で運び入れた。最初は、みんな半日から長くても丸一日の旅程と思っていたと思う。「ポン、ポン、ポン」と、心もとない音をたてる焼玉エンジンの漁船、その狭いデッキの上に、三三、五五と席をとった。母はホルドの上で、私はデッキカバーの上ですぐに横になった。父は仕事の関係で、この闇船と一緒に乗ることができなかった。港内検疫所のある小島まで、見送りに来てくれた。その日は、明日は米軍が進駐して来るという日で、役所での引き継ぎの仕事が残っていたのだ。父の上司は早々と逃げてしまい、父がその貧乏くじをひいてしまったとのことだった。岸壁で別れ、さらにボートで検疫所まで追いかけて来た父の心中は、私にもよく理解できた。

その父は、三カ月後に無事に引き揚げて来た。真面目な態度で、間違いなく全ての事項を引き継いだこと

で米軍の責任者から英文による感謝状をもらい、持ち帰って来た。この感謝状が、その後の父の就職に大変役に立ったということ聞いた。

開船のオーナー、そして船長、船員はすべて日本人であったが、彼らの我々に対する態度には、同じ日本人でありながらと思うことがいろいろあつて、腹が立っていた。我々の窮状につけ込み、足もとを見透かしているいろとせびってきた。検疫所小島への錨入れ料、チャーター料の割増しなどで、そのつど母もなげなしの金を払っていた。

開船は沖に出ると、たちまち高い波と潮流にもたそざれ始めた。波の山の頂上から、深い谷底へと一気に落ち込む。波の底から波頭は、遙か上に見える。その間も焼玉エンジンは心細い音を出しながら、ときどき止まりそうになっていた。

後年私が成人し学校を卒業して、ある船会社の陸上勤務の社員になり大型船に乗ることもあったが、あの引揚げ時に初めて乗った焼玉エンジンの漁船が、今までに体験したうちで最高に危ない船であった。

対島の沖にかかるころ、「台風の気配あり」とのことで、対島の島影に一時避難したが、そこは水神社のある狭い入江で、ここで二、三日じつとしていた。

その後は、天候も回復して一路下関に向かって航海した。好天ではあったが、やはり玄海灘の荒波は聞きしに勝るものであった。

やっとのことで下関港にたどり着いたが、あいにく山陽本線は台風のため不通となっていて、やむを得ずにそのまま開船で再び海路で下関を経て、尾道に向かうことになった。関門海峡を向かい潮で航行したが、それまで同行していた漁船の何隻かが脱落し、あつたという間もなく遙か彼方の反対方向に流されてしまった。

我々の開船も、今にも止まるのではないかと思うような、焼玉エンジンの音を立てながら潮流に立ち向かっていたが、幸いにも流されることはなかった。予定よりも大分時間がかかって、やっと潮を乗りきった。しかし、そのとたんにエンジンが停止してしまい、一同は肝を冷やした。

最終目的地の尾道港に、やっとの思いで入港した。

汽車で小松島に行くことになり、準備のために二日間、開船で起居することになった。私は夜になって船を抜け出して、尾道市内の映画館に入った。ちょうど「姿三四郎」を上映していた。だんだんと元気を取り戻してきた。

ようやく下船したが、携行してきた荷物の陸送手続に苦労した。せっかくに苦労してここまで持ち帰って来た、私たち一家にとっては唯一の財産である荷物も、鉄道輸送中に荷抜きをされてしまった。私にとって一番大事なものであった、先祖伝来といわれる「短刀」も姿を消してしまった。これからの生活再建のために必要最小限の財産で、なげなしのお金を支払って開船を雇ってここまで持ち帰った荷物のうち、めぼしいものはほとんど盗まれていた。小松島町の駅で、抜き取られた姿の荷物を受け取ったときの気持ちは、なんとも言えないものだった。今までの苦労のみが残ってしまった。

しかし、今考えてみるに、それまでは大切なものと思っていたものも、実は大したことはない。体さえ

健康で働くことができれば、それに越したことはない。命には代えられない。人間の欲は限りがないもので、失うものがある間は、これを保持しようとする。諦めの早いのも問題だが、価値の低いものいつまでもこだわっていることも愚かなことだと、旅の終わりになって悟ったことだった。

半月余りの引揚げ行。それは貨物列車での移動、開船での航海、露天にひとしいデッキ上での生活、そしていろいろな人との交流。人間の浅ましい行為などすべては、十二歳の少年にとってはまたと得られない貴重な体験であった。また、精神的にも肉体的にも鍛えられた、良い機会でもあった。

すべてが運命としか言いようがない。死を選ぶほかに策のなかった人、苛酷な生き方を選択するしか手段のなかった人も多数いたが、これはみんな戦争の結果であり、敗戦のもたらした運命であった。そのことを考えると、私は幸運であったと言わざるを得ないだろう。

私には、小学校から男子生徒全員で、浦項に海洋少

年団の合宿に行ったときの写真が一枚残されている。だから戦後六十余年になっても、かつての同輩と一度も連絡をとり合ったことがない。

私たちは、尾道から以前の生活地であった小松島町の母の実家を頼り、そこで間借り生活を開始した。私は幸いに、学年を遅れることなく小学校に編入され、翌年の昭和二十一年には、旧制の徳島中学校に入学することができた。それ以来、螢雪を積んで東大に入ることができた。

私の勝手な憶測では、終戦の日以降、一引揚者として自分に前向きな勢いが加わり、それまでの内向的な性格が変化して、積極的な行動力を持つようになったのだと思う。事実、中学校の成績をみても、他の同級生は、引揚者である私のそれにはるか及ばない状態であった。引揚者は、朝鮮人そのものと同一視してからかう者があったが、私の態度を見てすぐにはからかうことを止めた。

私及びその家族の外地での生活は、おおよそ五年間にしか過ぎない。自発的に移住したのだから、だれに

も文句は言えないが、その間に祖父、そして幼い妹を失い、新しい土地に基礎を築くどころか、すべてを失って命からがら逃げ帰って来た。短期間ではあったが、戦争による召集という予期しなかったことがからんでいる以上、計画どおりにはすべて進行せず、父の立場からすれば、自らすべてを壊すために移住したようなものであった。

遅かれ早かれ召集を免れることはできないとしても、なぜこんな不運な結果となってしまったのか？このことについて、父は戦後ひと言も語らなかつた。

戦争の恐ろしさは、個々の人の夢のすべてを壊し、変えてしまうことである。特に、将来のある子供たちの運命を、根底から変えてしまうことにある。まさに悲劇である。その悲劇が今なお世界の随所で発生し、止むことがない。平和裡の国際交流は、永久に夢であるのであろうか。